**第１７回観察会　2004年８月24日(火) 12:15～12:55　曇り**

**テーマ『秋風を待つ植物園』**

**☆ガイドレポート：植物編**

今月は先月に引き続き平日昼休みとなりました。雨の予報もあり天気が心配だったものの観察会の時間帯は太陽も照っていました。８月末ですが気温は確実にさがって涼しさを感じられる頃となりました。暦（二十四節気）のうえでも「立秋」の「処暑」といって暑さが和らぐとされる頃で、日長（昼間）も確実に短くなっています。
そんな秋のはじまりを感じてみよう、と考え準備しておりましたが、前日の雨の影響で植物園内がほどよく湿りたくさんのきのこが見られたので、いくつかのきのこを取り上げました。オニフスベ、アラゲキクラゲ、コフキサルノコシカケ、の３種です。参加者のみなさんには好評でしたが、冷静になってみれば秋とはあまり関係のないきのこばかりでした。
きのこの季節といえば秋だと思われがちですが、実際には「きのこのシーズン」は夏や春、そして冬にも訪れます。京都近辺の最盛期は夏（梅雨の合間、梅雨明けごろ）や秋でしょうか。オニフスベは、昨年は７月の上旬にたくさんありました。今年は園内でも賀茂川の土手でも８月下旬ごろがピークだったようです。サッカーボール大にもなり、文字通り子どもに蹴っ飛ばされることも多いようです。アラゲキクラゲのシーズンは長く１年を通じてみられます。食欲を誘うほど状態がよいのは雨量の多い梅雨や秋口でしょうか。コフキサルノコシカケは何年もかけてきのこが大きくなり続けますので、季節性はないともいえるでしょう。ただ、７月から８月にかけてたくさん胞子を飛ばして、その名の通り粉を噴いていました。私自身はあまり意識したことがなかったのですが、このような多年生のきのこにとっても分散し（胞子を飛ばす）新たな世代が生育するのに適した季節というのがあるのかもしれません。
その他、観察会ではとりあげませんでしたが園内にはたくさんのきのこが発生していました。さまざまな植物が、生きていたり折れたり枯れていたりさまざまな状態で存在していることや、直射日光があたる場所あたらない場所のいずれもが確保されていること、そういった条件がそろっていることが園内のきのこの種数を増やしています。今のところ確認されている種数は１５０あまりということですが（滋賀大横山和正さん、私信）近隣の吉田山のきのこが２００を超える（小田ら、２００３）ことを考えればもっとたくさん見つかるかもしれません。

ガイド：今村彰生さん（総合地球環境学研究所）

**☆ガイドレポート：昆虫・その他編**

今回であった昆虫のリストです。
アブラゼミ、ツクツボウシ、ミンミンゼミ、クロアゲハ、ヒメウラナミジャノメ、ヤマトシジミ、モノサシトンボ、ハンミョウなど。

ガイド：京都大学農学研究科昆虫研有志

**☆参加者の感想**

参加者の感想文です。実名・匿名の指定がないかたはすべて匿名にいたしました。ご了承ください。

* オニフスベにびっくりしました。若いうちは食用になるのかしら？（地球研　宮島敏明さん）
* 打てばひびくように名前を教えていただきありがとうございます。なんとなくわかっているように思っていた蚊も雑草（と呼ばれているもの）も皆で一つの世界なのですね。　　　　　　　　　　　　（初めての参加　中村佳子さん）
* 夏の終りの植物のじょうたいがわかって良かった。　　　　　　（近所のかた）
* 今日はキノコをたくさん見つけた。写真でしか見たことがなかったオニフスベは、直径20cmほどもある大きなキノコだった。あまりに大きいので人目について採られてしまうのではと思ったけれど、植物園だから人に採られずに見ることが出来たのだろう。今回も植物園のよさを感じた観察会だった。　　　　　　　　　　　　　（地球研　瀧野佳洋子さん）
* 今日はありがとうございました。さわやかな風を感じたくて職員だった時も散策したことがありましたが、見学会で「いったいどこを見ていたんだろう」と思うほど新鮮でした。最後のまとめのお話はさすが自然を相手に研究なさっている人の発言と感じました。「自然との共生」を心に留めました。　　　　　　　　　　　　　　　（元職員のかた）
* オニフスバはとても印象的でした。また出かけたいと思っています。樹木の会にも入って楽しんでいます。　　　　　　　　　　　　　（元職員のかた）
* いつも予定が合わずに残念な思いをしていたのですが、今回は運良く参加することができました。天気も暑すぎず、（蚊は相変わらず多かったですが）快適でした。キノコや植物の話など一人で行っただけでは分からないことを色々教えていただけて非常に楽しかったです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（農学部昆虫専攻の大学院生のかた）